

採用後の円滑な職務遂行を見据えた「教職スタート準備講座」の取組

教育学部附属教育実践総合センター 教授 石田 耕一

1 取組の背景と目的

今、学校現場では、いわゆる「2007年問題」といわれる団塊の世代の大量退職がはじまり、少数の中堅教員と多数の経験の浅い若手教員が現場を支えなければならなくなった。若手教員を取り巻く環境は年々厳しさを増すとともに、新採用教員には「即戦力」としての期待がかかり、より厳しい状況におかれている。

新採用教員に係る課題として、概括的に

- 授業を成立させられない。子どもを掌握できない。
- 職場としての学校で、うまく人間関係を築けない。
- ストレスへの耐性がない。

などが、指摘されている。その結果、新採用教員の担任する学級が「うまく機能しない状態」に陥ったり、保護者からの執拗な苦情に苦慮したり、職場の人間関係に悩んでいる事例が多く指摘されている。

このような状況のもと、学生に一般的な教養、教科等にかかわる専門的知識や指導技術を習得させるだけでは教員養成の役割を果たせなくなっており、職業人、組織人としての自覚、人間関係調整の能力、メンタル・ヘルスやストレス・マネジメントの能力などを育成し、課題に立ち向かう「たくましさ」や、挫折体験から回復できる「しなやかさ」を身に付ける指導を行う必要性も生じている。

2 「教職スタート準備講座」の取組

前述の課題を解決し、学生が卒業後、学校現場における「即戦力」、さらには将来「力量ある質の高い教員」に成長できるよう、年度途中ながら「教職スタート準備講座」を計画・実施することとした。

(1) 基本方針

① ねらい

本採用、臨時的任用にかかわらず、教職に就く予定の学生に、4月から支障なく職務を遂行できるよう、教員として必要な資質・能力を身につけさせる。

② 対象：学部4年生 大学院2年生

③ 講座の位置づけ：カリキュラム外の希望する学生に対する指導

④ 担当者：学部専任教員、客員教授、非常勤講師、埼玉県・さいたま市指導主事 等

⑤ 時期 第1期：11月から12月 第2期：1月下旬から2月

⑥ 指導内容案 求められる資質・能力、新採用教員を取り巻く状況から、以下の内容について指導を行う必要があると考えた。

(ア) 学部参与、客員教授による指導

ア 教師という仕事

イ 社会人、教師としての心構え

ウ 国語、算数、道徳、特別活動の授業づくり

エ 学級づくり

オ 生徒指導

カ 保護者との対応

(イ) 学部専任教員による指導

ア 教育課程について

イ 校務分掌組織について

ウ 教育活動と法知識

エ 事務の能力

オ 現代の教育課題

カ 教員のメンタルヘルス

キ 教育相談の技法

ク 困った保護者への対応

ケ 特別な支援を必要とする児童への対応

(ウ) 教育委員会指導主事等による指導

ア 教員の服務について

イ 学校保健の常識

ウ 生徒指導の基本

エ 学級経営の基本

オ 非行、少年犯罪、生徒指導の状況について

カ 学校における英語教育について

(エ) 研究発表会参加

(2) 計画と参加実績

① 第1期 各指導内容について、各講師の持ち味を生かすという観点から、各講師が自らの提案をもとに実施することとした。

② 第2期 講師全員で指導内容のすり合わせを行い、各講師の特色は生かしながらも、指導内容の重複する部分を整理することとした。さらに、さいたま市立学校の研究発表会参加も組み入れ、先進的な研究や道徳、特別活動の研究授業、研究協議に触れさせるようにした。また、教育委員会指導主事を招き、新任教員として身につけていなければならない心得等についての指導を行うとともに、教育実践総合センターの学校臨床心理部門の教員による「ストレス・マネージメント」「教員に必要とされる教育相談の技法」についての指導も行うこととした。

第2期 教職スタート準備講座計画表

教育実践総合センター

月日	曜	講義内容	
		3・4 (10:40~)	5・6 (13:00~)
1月21日	月		オリエンテーション
22日	火	社会人となる皆さんに伝えたいこと	教師の一日
25日	金		大宮東小学校研究発表会参観(国語)
29日	火	職場と出会う①(まず、学校を知ろう)	職場と出会う②(良好な人間関係を築こう)
30日	水	道徳の授業づくり①	道徳の授業づくり②
31日	木	算数の授業づくりの基本	算数の授業づくり①
2月4日	月	算数の授業づくり②	算数の授業づくり③
5日	火		浦和別所小学校研究発表会参観(道徳)
6日	水	子ども・保護者と出会う(学級経営の基本)	知っておきたい学習指導の基本①
8日	金		南浦和小学校研究発表会参観(特別活動)
13日	水	知っておきたい学習指導の基本②	子どもに寄り添う(生徒指導の心得)
14日	木	算数の授業づくり④	年間行事計画・指導計画と指導の見通し
15日	金	道徳の授業づくり③	特別活動の授業づくり①
19日	火		生徒指導特別講義 (さいたま市教委指導主事)
20日	水	知っておきたい教育法規	学校教育に関わる諸課題
21日	木	困ったときは(悩みの解決の初歩)	学級づくり(よい学級あつてのよい授業)
22日	金	特別活動の授業づくり②	初めての保護者会(はじめが全てを決める)
27日	水	教師が行う危機管理(子どもの生命・安心・安全の確保)	本物の教師を目指して(教師の魅力とやり甲斐)
28日	木	閉講の集い	

第2期計画表

- ③ 参加実績 第1期23コマ実施 参加学生 のべ 56名
 第2期26コマ実施 参加学生 のべ141名
 実参加学生数46名(院2年2名、学部4年40名、3年4名)

3 考察

「教職スタート準備講座」への参加が予想以上に少なかったのは(学年定員480名の半数が教職に就くと予想される中)なぜか考察する。

- (1) 周知方法…学部内の掲示板等でポスターの掲示を行ったが、意外にも掲示に気づいていないことが分かった。また、今回は初めての試みのため、長期的な計画を一度に提示できず、計画を提示した段階で学生の予定がすでに固まっていたことも考えられる。
- (2) 講義日…講義日が、様々な事情により曜日、時間帯を固定できなかった。時間割により、生活パターンが確立していると考えられる学生にとって、対応しづらかったと考える。
- (3) 学生の動向…4年生は、卒業研究以外に時間的余裕がある、また、卒業研究に専念といえども、教職に就く準備のための時間はあるという観念が、大きな間違いと考える。
- (4) カリキュラムへの位置づけ…「採用後つまづかないように」を売りに、また、「教職支援」の名を借りても、カリキュラムに位置づけられていない講義は、学生から相手にされない。今後このような取組を継続するためには、最終的には選択科目としてカリキュラムへの位置づけが必要である。

4 今後の取組

出口の段階で学生に必要な資質・能力を身に付けさせることは、避けて通ることのできない使命であり、平成20年度も、平成19年度の反省に立って、改めてこの取組を推進していく。そのための基本方針として、

- (1) 講義実施の曜日、時間帯を固定する。さらに、可能であれば、異なる曜日で同一内容の講義を2回行う。
- (2) 参加者を原則事前申し込みによる固定制にする。
- (3) 進路指導委員会の実施する教員採用選考試験対策のためのセミナーとの連携をはかり、採用選考試験対策のためのセミナー終了後直ちに、教職スタート準備講座を開始し、年間を通して教職に就くための準備を学生にさせるようにする。
- (4) 学校フィールド・スタディと連携し、教職スタート準備講座で学んだことが学校現場で生かせるよう指導内容の工夫を行う。
- (5) 使用する教材、資料の研究開発に努める継続的に使用できるものを作成する。
- (6) 学部教員、教育委員会指導主事、前現の小中学校教員による指導の機会を一層拡大する。

5 最後に

中央教育審議会において、「教職実践演習(仮称)」が示され、その実施の在り方が模索されている。この取組によるノウハウの蓄積は、この「教職実践演習(仮称)」の実施に資するものであると考える。4月1日に辞令を受け取った時から始まる、新年度・新学期の怒濤のような日々、そして、新採用であろうとも降りかかる様々な課題が予想される中、卒業生間もない教員が余裕を持って職務を遂行できるよう、今後も研究・実践を行いたい。